アフガニスタン旅行の印象 (アジア・ハイウェイ に沿ってカブールからヘラートへ)

矢 嶋 澄 策*

An Impression of Travel in Afghanistan from Kabul to Herat
along Asia Highway.

By

Sumisaku YAJIMA

I 旅行の目的

1970年11月6日から約40日間、早稲田大学西南アジア学術調査団の一員として、アフガニスタン、イラン両国の踏査を行なった。この調査団は1970年8月から、1971年4月初旬に亘る、西南アジアの考古学的研究を目的とするもので、隊長の早稲田大学文学部教授松田寿男博士（東洋史研究室）と8名の同学大学院研究科および同文学部の学生によつて編成され、その指導をかねて、松田教授の外に、桜井清彦教授（考古学研究室）、川村喜一助教授（オリエント考古学）および筆者（同教育学部地学研究室）の4人が加わった。今回の調査はアフガニスタン、イラン、イラク、シリア、トルコなどの砂漠の国々を対象としたが、考古学上未踏査地域と云われる、アフガニスタンとイランの南部に主力を注ぐこととした。東洋と西洋とを結ぶものとして二つの隊商貿易路線が古い時代から開かれていたそのひとつであるイラン北部のエルブルス（Elburz）山脈南麓部に散在するオアシスを結んだイラン北道はいわゆるシルクロードとして知られているもので、欧米各国の研究者によつて学術調査が進められている。これに反してもうひとつの路線すなわちイラン高原のケルマン（Kerman）に発し大砂漠の南部を東行して、ザーブル（Zabul）を通り、ヘルマンド川（Helmand Rod）に沿つて更に東に進み、アフガニスタンのカンダハール（Kandahar）、ガズニ（Ghazni）などを経て、首都カブール（Kabul）に至る隊商路については、従来ほとんど調査されたことがなく、史的記録の解明すら行なわれていなかった。

この南の路線は古代のインドとイランを結ぶ幹線の一つであつて、両文化圏の間に密接な政治的、文化的関係をもたらしただけでなく、中国からの烏弋山離道と云われて、重要な交通路であつたと思われる。今回の調査で松田教授は、中国側およびギリシヤ側に残っている史的記録についての研究を、実地で裏付けることを、桜井教授・川村助教授は考古学的な調査研究によりインド、イラン間の導管地帯の古代の様相を探ることを、筆者は当地の文化財を採集し、これに科学的検討を加えるとともに、この調査地域全般について、地質学上、資源上の考察を行なうことを、それぞれ目的とした。

この調査では日本製ジープ3台を用いて、短時日にアフガニスタン内約2,100km、イラン内約2,500kmを踏破したが、幸にも天候に恵まれはしたものの、限られた調査期間内では、思うような成果をあげ得なかったが、この踏査行の間に得られた、見聞とそれぞれの土地の印象などを綴つてここに紹介してみたい**。

* 早稲田大学教育学部理学科地学教室

** 本稿ではアフガニスタンのみにとどめ、イランについては稿を改めることにしたい。

II アフガニスタンという国

実をつけた同じ枝に赤い花が誇らしげに咲く、アカシヤの香りのたゆたうニューデリー (New Dehli) の街をあとに、約1時間程で、機はインダス河の上流、パキスタンの北部を斜に横切つて、アフガニスタンの国境稜線上にさしかかる。今迄眼下に休らぎを与えてくれた緑濃い平野にかわつて、茶褐色の山肌をさらけだした幾条もの山稜線がちょうど北東の一角に要をもつた扇を半開きにしたような形で広ろがつている。しばらくするとこれらの稜線の間に、水流の跡らしい白けた部分をところどころに抱いた灰褐色の広い谷が開けてきた。小さな緑色の斑点が点々と認められるに過ぎない荒漠たる山嶽地域を縫うように通り過ぎると間もなく高度を下げ始めた。ニューデリーから2時間足らずの飛行でアフガニスタンの首都カブールについた。

アフガニスタンという国は、現在わが国との交易もそれほど盛んでないこともあつて、一般にはあまり紹介されていないようである。この国はいわゆるアジア中央部イラン高原北東部の台地にあつて、アム河 (Amu Darya) とインダス河 (Indus 河) とに挟まれたヒンズークシュ (Hindukush) 山脈をいだく、海のない乾燥しきつた国である。アフガニスタンという国名は、この国の支配的部族であるドウラニー族 (Durrani) の別名アフガンからきており、アフガンの住んでいるところという意味らしい。西部は砂漠続きでイラン国と、北部はソビエト・ロシヤの中央アジア聯邦に属するタジキスタン (Tajekistan)、キルギジア (Kirghizia)、およびトルクマニア (Turkmania) と接する。北東部の一角は中国の新疆 (Sinkiang) 地方と、東部と南部はパキスタン国のパシュトゥネスタン (Pashtunuestan) と接している。パキスタンとの国境については、はつきりしていないところが多いので両国の間では、帰属問題で現在も紛争が絶えない状態である (第1図参照)。

第 1 図 アフガニスタンの主要道路々線図

この国は古代から、中央アジア、西アジアとインドとを結ぶ交通の要路にあたり、東西の文化、風習がとけ合つたところであつた。この地域が、紀元前2,000年頃アフガニスタン一帯を支配していたアリヤ人(Aryh)によつてアリヤン(Aryans)とよばれていたことが、1,500 B. C. 時代のバラモン経の聖典ヴェダス(Vedas)や、600 B.C. のゾロアスター教(Zoroaster)の聖典アヴェスタ(Abesta)などに記されている。この地域は東西交易の接点であつたためか、古くから諸民族の興亡の中心地となり、政戦が絶えず繰り返されたところであつた。既に紀元前5世紀には、当時イラン高原一帯を平定した古代ペルシヤ帝国のアケメネス王朝(Achemenes)に属していたが、330 B. C. にアレキサンダー大王(Alexander)の東征によつて、ギリシヤ文化のヘレニズム(Hellenism)の影響を受けた。紀元前3~2世紀頃にディオドウトス(Deodotus)によつて建設されたギリシヤのバクトリヤ王国(Bactria)の支配下に入つた。紀元1世紀前後の頃となると、クشان王朝(Kusan)の治下になり、いわゆるガンダラ(Gandhara)美術の隆盛をもたらした。その後パルティア王国(Parthia 248 B.C.—226 A.C.)、サザン朝ペルシヤ(Sasan 226-651)の支配下でゾロアスター芸術が広まつた。8世紀からイスラム勢力の影響を受け、10世紀後半この国のガズニにトルコ系のガズニ朝(Gazni)が起つて、最初のイスラム国家を建てその勢力は北インドにも及んだ。

1037年には1157年まで続いたセルジューク・トルコ(Seljuk-Turk's)帝国が起つて、イラン、イスラム文化の最繁栄をもたらした。その後、イルカレ朝(Ilkhanate 1258-1411)、ティムル朝(Timurids 1405-1500)、サファヴィ朝(Safavi 1502-1763)などの支配を次々に受け、インドのムガル帝国(Mughal)にも東半部を攻略された。18世紀も後半の1774年アーメッド・シャー・ドウラニー(Armed Shah Durrani)によりこの国の東南部の都市カンダハール(Kandahar)付近にドウラニー王朝(Durrani)をたてその地を近代アフガン王国の首都とした。やがてこの王朝もこれまでに興つては滅びさつていつた幾多の王朝と同様に、内紛があいついだ。国政が乱れ始めたその隙に、かねてよりこの地へその進出を狙つていたイギリスとロシアの勢力が対立し、遂にイギリスとアフガニスタンとの間に2回に亘るアフガン戦争(1838-41と1879-81)が引き起こされた。その結果、ドウラニー王朝は滅亡して、アフガニスタンは英国の保護国となつた。しかし第一次世界大戦後1919年反英運動がおこり、対英交戦の結果8月に独立が宣言され、その後数度の内乱を経て、1929年10月16日ナーディル・カン(Nadir Khan)が王位について現王朝を開いた。

このように幾度かの政変の度毎に、種々の人種の支配を受けたため、この国の宗教は王朝と結びついて存在した性格上その都度変遷を余儀なくされた。現在は回教がこの国唯一の宗教となつてはいるがかつてインドにおこつた仏教は250 B.C. 頃からこの国に入り、紀元1世紀から7世紀頃迄は繁栄を極めた。現在バミヤン(Bamiyan)の谷の高さ60mにもおよぶ世界最大といわれる仏像に当時の仏教の隆盛ぶりがしのばれる。これは白堊紀の赤色砂岩中に彫りこまれている。この外南部地域には、仏教、ゾロアスター教などの遺跡が数多く残され、未発掘の状態にある。古代イスラム文化時代の回教遺跡も多数発見されている。

この国の面積は約650,000平方軒で、人口は約15,000,000位といわれている。全領ことごとく砂漠と秃山であつて、オアシス以外、緑色といえるものは、ほとんど認められない。年間降雨量は平均25mm以下で、中央部の砂漠地域では、乾期となると6mm以下ともいわれる。気温は平年で春季(3, 4, 5月)の平均は12~13°C、夏季(6, 7, 8月)26~27°C、秋季(9, 10, 11月)10~12°C、冬季(12, 1, 2月)7°Cとなつてはいるが、気温日較差が大きく、30°Cにも及ぶことも稀でないという。このために岩石の膨縮が著しく、機械的風化作用によつて崩壊を起している。天然のオアシスの周辺、ヘルマンド川(Hermand Rod)、カース川(Khas Rod)、ファラ川(Farah Rod)、ハリ川(Hari Rod)、ムルガブ川(Murghab Rod)などの内陸川の流域およびカナートと呼ばれる人工灌漑から給水されている段々畑では米、麦などの穀物のほか、西瓜、メロン、ブドウ、ザクロなどの果実、および野菜や根菜がよく実つている。これらは都邑地のバザールとよばれる市場に集められて、豊富にかつ安価に供給されている(第2図)。とくに

第2図 アフガニスタンの市場での果物、野菜、ザクロ、ナス、トマト、メロン等

第3図 アフガン人の常食のノン(ナン)の売場 Herat にて

ブドウは種類も多く、また美味である。この国は全域に亘って乾ききつたところであるから、水が貴重なものであるということは想像以上である。水をもとめて家畜の群れとともに移動する遊牧の民を今もいたるところで見られる。首都カブールに上水道の設備がある以外は、内陸の各都市でさえ人間の飲料に供する水は自然湧水に頼るほかはない。この水とて、家畜の排泄物などで汚染されているので、原始的生活に不馴れた旅行者たちには、煮沸した飲料水を携行するか、または路傍のパザールでみられるチャイ・ハナ (Chai Hana) なる茶店で茶または湯を購入するのが安全である。また一般に泉の水でも硬水であることが多く、ところによっては多量の塩分をとかした塩水である。食物は首都カブールで求められるやや欧風の料理以外は、一般にアフガン風のもので、その代表的のものはピラウスの変種ともいえる羊肉や鶏肉と野菜類とを煮込んだものを米飯の上にかけて食するものである。また山羊やラクダの乳で作ったヨーグルトが常用されているが、わが国でのそれに比べて、若干異臭があり、酸味も強いので、幾分馴染みにくいようである。またノンまたはナン (第3図) と呼ばれる小麦の粗曳きの粉をこねて焼いた円盤状か網目状の弾力のあるパン

とも軟いセンベイとも云えるものを主食としている (第3図参照)。

この国には1哩の鉄道もなく、国内の交通は以前はもっぱらラクダによる隊商路に頼っていたが、最近では世界各国からの経済援助によって、アスファルトまたはコンクリート舗装の自動車道路が建設された (第1図参照)。とくにアジア・ハイウェイ (Asia Highway) の南廻りの路線は、パキスタンのペシャワール (Peshawar) から有名なカイバル峠 (Khyber) をこえて首都カブールを通り、大きく弧状に南下して、ガズニ (Ghazni)、ザブール (Zabul) カンダハール (Kandahar)、ファラーロード (Farahrod) ヘラート (Herat) を経てイランとの国境の町エスラムカラ (Eslam Qala) から、イラン国に通じている。カブール、カンダハール間505km、カンダハール、ヘラート間644km、ヘラート、エスラムカラ間125kmである。このハイウェイはカブール、ガズニ間はアメリカ合衆国によつて、ガズニ、ヘラート間はソ連邦によつて建設されたとのことである。この交通路は、全線有料道路であつて、所々に検問所が設けられて、料金徴集が行なわれているが、筆者らの経験からすると適用期間は1日限りらしく、横路に入つたり、途中で宿泊したりすると切角支払った料金が無効になるようである。しかしこの地で英語が全く通用しないことから起つた混乱かもしれない。この外、カブールから北に向う主要道路はソ連邦によつて建設された戦車の通行の可能な立派な道路で、クンダス (Kunduz) で、アジア・ハイウェイ北廻り路線と分岐して、国境の町シェルカンバンダル (Sherkan Bandar) を通りソ連領に入っている。途中カブールから124kmの地点で標高約3,500mに達するが、これは道路としては、世界最高地にあるといわれる延長2,600mの大隧道が掘られていて、付近からヒンズークシュ (Hindukush) 山脈をきざむ大溪谷が眺められ、この国自慢の景勝地として紹介されている。

III カブールとその近郊

カブールはこの国の東部にあつて、標高2,000m以上のヒンズークシュ山脈から分岐する山稜に囲まれた1,800m内外の高原盆地内にある。カブール郊外から北流してきたカブール川 (Darya i: Kabul) は東流する支流カムカマス (Darya i: Camcamas) とこの街の西部付近で合して、南東方向に延びる急峻な山稜を横切つて東北東の方向に大きく流路を転じ、さらに東方に流路をとつて最終にはパキスタンのインダス川に合流する。このカブール川によつて、カブールは地理的に南北2地区に分割されている。

カブールはこの国の首都であつて人口はおよそ50万、美しい王宮が街の中心部にあり、1933年王位についたマホメッド・ザヒール・シャー陛下 (H. M. Mohammed Zahir Shah) によつて統治されている。11月初旬の気候は晩秋の感じで、白樺に似た街路樹が全く黄色となつて散りかかつていた。朝晩の冷えこみは厳しく、気温は氷点下に降つて、路面が凍つて迂るようであるのに、日中陽のあたる場所では、暑い位に汗ばむほどである。

カブール川が深い谷を刻んでいる北西—南東の山稜には、古い時代に築構された城壁が残つていて、ところどころに見張りや、ノロシ塔などの遺跡がみられる (第4図)。この城壁の東側は旧市内で、そこには王宮のほか官公街、各国大使館、銀行、ホテルなどがあり、市街北東方の飛行場に通じている。一方西方の新市街には、大学や博物館* などがあり、新時代の都市化が進められている。近代建築物も所々にある

第4図 カブールの旧市街を望む
R. 王宮 C. 城壁

第5図 Kabul 郊外のヒンズークシュ
山系の一翼で2322mの山頂に
傾斜不整合が認められる

が一般に住民の住居は石造か、土造の小型のものが多く、黄褐灰色の至つて色彩に乏しい構築物が立ち並んで、山の高いところまで及んでいる。街の中心を離れると平地が広がつて発達しているのに、どうしてけわしい山の高所に住宅地が発達しているのか、理解に苦しむことである。古い城壁を残す山は、その下部が主に結晶質の石灰岩の団塊を多く含むホルンフェルス化した粘板岩を主とした複雑な褶曲を示す地層に閃緑岩の進入を伴っている。

山頂部は比較的傾斜の緩い地層が載つていて一見傾斜不整合を示している様である (第5図)。この町の東方に約40mの標高差を示し厚い礫で覆われている段丘状の小丘陵があつて、その山頂で先王ナディール・カン・シャー (Nadir khan Shah) の墓所が目下建設中である。これはこの国で産出する美しい大理石の大建造物であるが、成生時の異状堆積やその後の褶曲断層などの様子を示すあざやかな縞模様をもつた大理石の石材 (第6図) を黒色の斑れい岩で縁どつて使っている。縞模様を示す石材が60×100cm位のブロックとして上下左右の模様の調和を考慮することなく甚だ乱雑に並べられているため何か無秩序のような感じがした。旧市街の北の一角にキリスト教徒達のささやかな墓地があるが、ここにシュタイン博士 (Dr.

* この考古博物館は、遺跡発掘品を多く所蔵し、特に古銭の収集では有名であるが、最近火災にあつたため、目下復旧中で仮陳列館である。

第6図 アフガニスタン産大理石で（建築材料）異常堆積を示す

第7図 カブールにある Dr. Mark Aurel Stein の墓

M：松田教授 S：桜井教授 外調査隊員

る。この町は外貨管理が至って緩やかで、銀行での外貨と自国貨幣の交換は自由に行なわれている。通貨はアフガニス（Afghanis）といわれ、交換基準は日によって若干変動するが、この頃では米ドルにつき75～85アフガンである。

しかし銀行で受取ったアフガン紙幣が、ときによると極めて汚傷していることがある。地方を旅行する際は汚傷の著しい紙幣は、通用しない場合があるので注意を要する。この街には昨今多数のヒッピー族が群っているのが、他の国の都市と目立つた違いである。この国は全国民が回教を信奉しているため、朝・昼・夕、メッカの方向に向つて土下座して礼拝している姿が、路上といわず、床上といわず、至るところで見られ、異教の旅行者には物めづらしい風習である。11月という月は、教義の上から断食を励行*する月らしく、夜明けから、日没まで日照のある間は、食料、飲料はもとより喫煙すら断つことを義務づけられている。

筆者らの旅行期間は丁度この月にかかったため、行く先々至るところでこの風習の影響を受けた。旅行者にはなんらそのような制限はないけれど、日中食料を販売する店が、閉されていて事実上日没すぎまで食事をとることができないことと、公の施設は午後には閉鎖されてしまうことなどの不便が感じられた。この国は非常に厳しい警察国家で、警察官や軍要員が多額の権限を持っている。写真撮影については、特に厳しい制限を受けるところがあるので充分留意しなくてはならない。

この街の北方、アジア・ハイウェイ北路に沿つて約100 km 程の地点から支路を西に数 km のところに、イスタリフ（Istalif）なる部落がある。ここはこの国の唯一の陶器の産地であり、濃い青緑色の 上薬を塗

* 断食のことをラマザンと云っている。

Mark Aurel Stein) の墓がある。この人は1812年ブタペストに生れた地質学者であつて、インド政府の顧問として、西南アジアの考古学的遺跡を調査し、東洋史学界に輝かしい業績を残したが、1943年10月26日カブールのこの地で病没し、ここに葬られているのである（第7図）。この町には3つの映画館と2つの劇場以外はまったく大衆の娯楽施設がない。ラジオ放送はあるがテレビジョンの放映は、国全体として一カ所もない。婦人はチャドールという、無地または細い柄模様のついた大きい布地で体を完全に覆い、さらにチャドールと称する覆面で顔を隠してしまつていたので、若い婦人はおろか、年老いた人すら、女性の素顔をみるができない。宿屋というべきものは数多く存在するが、外国人の宿泊に適した施設は僅かに3軒である。このうち最も新しい最高級のホテル・インターコンチネンタルよりもカブール・ホテルの方が街の中心地にあつて便利である。このホテルは3階建であるが、エレベーターの設備がないため、階段を利用しなくてはならない。この街が高い高原にあるためか、階段を一気に登るのに息苦しい思いをした。

食事については、前にものべたが、一般旅行者向きの食堂としてはホテルの食堂と数軒のレストランのほか、カイバールレストランというのが、街の中心にあつて、セルフ・サービス式の営業をしていて非常に繁盛している。

つた陶器で有名であるが、この附近はヒンズークシュ山系を背後にして、ベグラム (Begram) の高原が接する地域で、広範な扇状地が発達している。良質の陶土がこの地帯に産出することでこの工業が起つている所以のことである。

首都カブールから、一部アメリカ合衆国によつて建設されたアジア・ハイウェイのアスファルト道路を南下すること約105km のところに、ハイダン (Haidan) という小部落があつて、標式的なオアシスが見られる。土壁で囲まれた数軒の農家の周囲に幅2~2.5m の掘り割り水溝をめぐるし、ポプラ並木が、その土手に沿つて植えられている (第8図)。この地帯の基盤は薄くはげる片理の発達した黒雲母片岩で構成されていて、一種の残丘が小丘陵をなしている。基盤岩の露出するこの小丘陵を離れると一般に広い平坦な砂漠で、直径約4~5cm の角礫や亜角礫からできている。

この砂漠平原の幅は、およそ3~4km で、その両側を、3,000m 前後の高さで南北に近い方向の山嶺で限られている。両側の山脈の稜線が互いにほぼ等しい高度を有することおよび砂漠平原と甚だ対照的な地形を示すことからこの山脈にはさまれた広い谷は、断層谷であつて、それが埋められたものかも知れない。この部落よりさらに15km 程南下すると、ほぼ東西方向の丘陵地があつて、南北2方向の流路の分水嶺を形成している。北に向う水系は、すべてカブール川に合流し、はては遠くパキスタンを南下するガンジス河に流入しているが、南流する水系は、ガズニ川 (Dry Ghazni) に合流して、アベ・エスタンダ (Abe Estanda) なる湖で終り、海に到達しない内陸川である。この付近のザナカン (Zanakan) 部落の近くに至るとキャラバン・サライ (Caravan Sarai) なるかなり大規模の隊商宿の廃墟があるが、現今の道路の完備した地域はトラックによる物資輸送が行なわれるようになったためロバ、ラクダによる交易はすたれ、全く荒廃してしまったものである。ここを通つたのは、丁度旧暦10月15日の薄暮時で、澄み切つた砂漠の東の空におりから昇つてきた、大きい黄色の月に、まさに“荒城の月”の詩情にひたることができた。

第8図 Haidan に見られる標式的オアシス、前方黒色の岩石は黒雲母片岩の地層

IV ガズニ (Ghazni) およびその周辺

カブールの南約150km のところに、ガズニ (Ghazni) なる集落がある。この街が史書に現れたのは紀元683年、アラブの侵入の際が最初であるといわれるが、恐らくは紀元前6世紀の頃シラス (Cyrus) やダリウス (Darius) が、また紀元前4世紀のアレキサンダー大王の軍隊などがここを通過して、カブール方面に進軍したことは確からしい。紀元前1~2世紀頃はクシャン (Kusan) 帝国領の一地域であつた。6世紀になつて、この地域はザブリスタン (Zabulistan) に含まれた。7世紀の中頃には、この地方に仏教が著しく侵透して、これよりはるか古い紀元前3世紀頃のアショカ (Ashoka) 王に始まつて次第にその数を増した僧房が数百を数えるに至り、修道僧も千を超えたようである。この街の北方8km 位のところにあるタパ・イ・サルダール (Tapa-i-Sardar) なる小高い丘でイタリーの探検隊によつて最近発掘が進められている。僧房の遺跡*から、当時の様子が推測される。この発掘物は、標高10数米の石英片岩から成る残丘の頂上にあつて、壁面には、仏像の彫刻が残されている。この街がガズニ王国 (962-1186) の首都として、輝かしい史跡をのこしたのは、マフムード大王 (Sultan Mahmud the Great, 998-1030) によつてである。彼はこのガズニからパキスタンに亘つて権勢をふるい、広くイスラム教を広めた。1151年に至つてゴ

* 現在発掘進行中で、見学すら許されていないし、未だ発表もされていない。筆者らは僅かにかい間見たに過ぎない。

第9図 Ghazni に残された2つのミナレット (Minaret)

第10図 Ghazni Masud III 宮殿壁画中の文様

遺跡の床の敷石は、すべて大理石で、腰板となつてゐる側壁も、美しい彫刻をほどこした大理石であるが、伽藍のドームと壁の大部分は赤レンガを積み重ねたものである。側壁の彫刻は極めて細かく緻密であるが、このなかに第10図のような文様がある。これがわが国の寺院の書院の明り窓に用いられた形態に全く一致しているのは特に興味をひいた。首都カブールの防塞のためこのガズニに作られた城壁が、19世紀の英、アフガン戦争のときの被害を物語っている。保塁の残がいからかつて谷間を見張つていた砲台の偉容がしのばれる。この街の市場 (Bazaar) では、この地方の遊牧民の民芸品、装飾品が売られているが、とくにポストインカス (Postinchas) という独特の羊皮の上衣が特産品となつてゐる。

ガズニから南西方向に進むハイウエイは、その方向を僅かずつ西に向きを変えて緩かな弧状をとつてゐるが、砂漠の中を通つてゐる際はほとんど直線的に走つてゐるよう感じられる (第1図)。

第11図 砂漠の最上段の平坦面とメッサ (mesa) 地形

約15mの高さの間に2~3段の段丘面がみとめられる。現在の川筋は最下位の段丘面から約2m下刻しているが、砂漠となつてゐる最上位の段丘面には、ところどころに切れ目があつて、一種のメッサ (Mesa) またはビュート (Butte) (第11図) のような地形となつてゐる。この付近の砂漠は幅約20 km 以上もあつて、その両翼は標高3,000m 以上の山脈となつてゐる。これらの山系を構成する地層は、遠望によるところでは、甚だしく褶曲を受け、直立に近い傾斜をしているらしく、山頂部は鋸状の形態を示している。た

ーリッド王のアラウデイン (Ghorid King Alauddin) がこの街を焼き、つづいて1221年には蒙古王ジンギスカン (Chengiz khan) のために完全に破壊された。それ以後今日まで、現在このハイウエイの近くに姿をとどめる2つの塔 (Minaret)* (第9図) によつて、僅かに往時がしのばれてゐるにすぎない。最近イタリーの学者による発掘作業によつて、マスード三世 (Masud III 1099-1114) の大理石造りの王宮が発掘された。この発掘跡をみると、かなり大規模の洪水によつて、埋没されたようにも見える。15世紀になつて、蒙古人によつて破壊された地域の南部が次第に復旧され、ティムール朝 (Timurid 1405-1500) 時代には文化復興が行なわれ、スルタン・アブダル・ラザーク (Sultan Abdul Razaq) の墓所が建設された。現在はその隣に美術館が建てられていて、イタリー隊によつて発掘された出土品が陳列されてゐる。

高は2,220m で、ハイウエイはここから南に向つて緩い勾配をとりながら降つて行く。道路はヘルマンド川 (Hermand Rod) の支流のうち最も長い流路をもつものの一つであるタルナク川 (Tarnak Rod) に沿つて作られている。ガズニを去ること105 km のところで、このタルナク川が、砂漠の平原を下刻している様子が判然となつてくるが、更に南下してカラート (Kalat) に近づくと、この下刻がさらに著しく目につてくる。川床は扇状地堆積物であるが、かなり硬結してゐて、礫層というよりは礫岩層とでもいえそうである。泥岩の薄層を挟んで南方に2~3°傾いてゐる。この川を挟んで川床から

* 現在のミナレットは円塔形であるが、この塔は八角塔であるのが特長である。

だ個々の山頂はほぼ同じ標高で連続している。カラートは古い遺跡のある集落であるが、ハイウェイの南側に六角柱の塔が全く砂漠中に単独に一本立っていたのが目についた。この塔が古い寺院の跡か、燈台か、ノロシ台であつたのか、これを確める証は何1つ残されていなかった。

V カンダハール (Kandahar) およびその近郊

カラートから次第に方向を西にかえるハイウェイを138km ほど降つて行くと、標高1790m のところに、カンダハール (Kandahar) の街がある。この街はこの国第二の都市であつて、古い時代にはアレキサンダー大王の軍隊が駐屯するために建設された、いわゆるアレキサンドリヤの一つであつて、ギリシヤ語でアラショシヤ (Arachosia) と呼ばれていた。すでにのべたように1774年この地に生れた、アーメッド・シャー・ドウラニ (Ahmed Shah Durrani) によつて、近代アフガン王国の最初の首都となつた。この町にある立派な寺院には、予言者マホメッドの神聖な上衣が祭られているという。現在の市街地の南口すなわちヘルマンド川の支流であるアルガンダブ川 (Arghan dab Rod) の流域には、石灰岩、硬砂岩、黒色粘板岩などの地層が N 40°E, 78° SE の走向傾斜で、屏風の様に連っている。この岩壁は往時城壁に用いられていたらしく、山嶺にその遺跡を残しているほか、多くの見張窓がこの城壁のところどころに残されている(第12図)。この山なみがアルガンダブの平原に接して、若干低くしかも平坦になつた部分に古い時代のカンダハールの城跡が残されている。現在ハイウェイはこの直下を西に向つていて、この附近に広い給油場ができています。この城は16世紀にバブル王 (Babur) によつて発掘されたもので、古代の彫刻などが多数遺されている。カンダハールは、この国の南部における最大の都市であつて、気候も温暖でかつアルガンダブ川流域の肥沃の地を占めているため、緑にとり囲まれた美しい農耕地がひらけている。草花の香りと小鳥の啼き声が、早朝のさわやかな空気に乗つてはこぼれてくるホテルの庭のひとつときは、荒漠たる砂漠の旅のつかれが久方振り癒やされる思いであつた。近ごろアメリカ合衆国が、この国への経済援助として、この国の農業の振興をはかるため多大の開発援助資金を費して南部砂漠地帯に灌漑によつて、農耕地を作る大工事を行なつていて、目下さかんに灌漑溝の掘さく、構築を行なつていて、この町の南に連つている標高2,000m 位の山塊に大きいトンネルを穿つて通水している。この町には現在かなりの数の軍隊が駐屯しているらしく、新設灌漑溝の北方に広い練兵場を作つて訓練していた。この街の付近から民家の屋根が円いドーム状となり、東方に見られる平屋根の家屋と様子を異にしている。

第 12 図 Kandahar 郊外のオアシスと古城跡と城壁のあと

VI ポスト (Bost) およびその近郊

カンダハールからハイウェイはやや北寄りに転じて、約122km ほどでアジア・ハイウェイからポスト (Bost) に向う道の分岐点にある、ゲレシュク (Gereshk) の部落に達する。ここからアジア・ハイウェイを離れて南西方向にタルム川 (Tarm Rod) に沿つて、139 km 程下つたところに、ラシュクアルガー (Lashkargah) の市街がある。この付近はヘルマンド川の支流アルゲスタン川 (Argestan Rod) とタム川とに挟まれる砂漠地帯である。この砂漠は大部分標高878m 前後の平坦面をなしており、固結した赤褐色の頁岩や石灰岩の礫よりなる赤褐色を呈する部分と黒色の玄武岩質岩石と粘板岩などの小塊岩からなる黒色を呈する部分とがある。その一部には緩い起伏を示す砂丘 (Sand dune) 状の地形を示すところが見られる。この道筋の西側に、直径約3m 高さ約6m 位の煉瓦造りの円形の窯で石灰岩を焼いて石灰を作つていた (第13図)。燃料にはラクダ草を使うらしく、この草を乾燥して積み上げていた。ラシュクア

第 13 図 Lashkargah 市街郊外の煉瓦
焼窯

付近では綿の栽培にも適しているらしく、製糸工場も稼動している。11月初旬であつたせいか早朝は7～8℃の低温で肌寒い冷い空気が流れているが、いろいろの草花が咲きほこつて、和やかな雰囲気をかもし上っていた。砂漠の平坦面は、他の地域と同様、その上表面1.5～5m位の間は平坦面と平行に配列した頭大、小指大のやや扁平な大小の礫からなり、これらは泥質物で固められ、全体としてかなり固くなっている。下部は幾分砂質となり次第に砂層に移化している。礫種は場所によつてかなり異なっているが、粘板岩、石灰岩および花崗岩質が代表的である。この街からヘルマンドの川筋東側に沿つて約11km南下したところに、ポスト（Bost）という地域があつて、川の右岸に多数の遺跡がならんでいて、往古にはこの付近が大いに栄えた様子が伺われる。この遺跡の群れの中に直接約10m、高さ6m位の赤煉瓦をつみあげた円形の塔がある。最上部は截頭円錐形になつていて天井がない。この塔の基部は地下深く掘り下げられていて、下底に近く厚さ約1.5mの粘土層とその下に約2mほどの礫層があり、底部は石灰質のマトリックスで固められた礫岩層と思われる地層に到達している。この塔が建造された目的は判然としませんが、恐らくは飲料水などの水汲場に用いる井戸としてつくられたものと思われる（第14図）。このような廢墟の

第 14 図 Bost 旧跡に残つた水汲場と
思われる塔

第 15 図 Bost 古城とアーチ型門の入口

群れが、延々と連る地の最南端に、標高約60mの石灰岩からなる小高い丘陵がある。その丘の頂上部に最近発掘されたものらしい古城の遺跡がある。4層建て位の高さの煉瓦作りの城で、表面を礫と泥で塗り固めている。この城を中心として外側部に城壁が築構されているが、その内側はかなり広い広場になつていて、入口と思われる北側の部分に、アーチ型の門があり、イスラム芸術の彫刻や、タイル細工で飾られて

いる(第15図)。この地域はもともと7世紀にイスラムの侵入によって開かれたところで、11世紀にはガズニのスルタン・マスド(Sultan Masud)によって築城され軍や軍象の冬期の駐屯地とされていた模様である。13世紀にはジンギスカンの進撃で滅亡したといわれているが、このときはジンギスカンの軍勢は多数の軍船をもつてヘルマンド川を遡行し来撃したと伝えられている。ヘルマンド川流域の南部は広大な砂漠地帯であるが、パキスタンとの国境近くからは、大理石やオニックスなどが多量に産出しこの地を通つて中央に運ばれているという。

VII ヘラート(Herat) およびその近郊

再びハイウエイにもどつてゲレシュクからのハイウエイは、次第に北方に向きをかえる。この付近の山系は、泥質頁岩を主とする地層からなり、走向 N 30~40°E 傾斜50~65°NW の単斜構造をなす様である。デララム(Delaram)の村落の近くに至ると、ヒンヅウクシュ山脈から扇状に延びる支脈群の南西部を、ほぼ直角に横切るようになり、今迄の直線に近い路線が次第に屈曲をとまなうようになる。デララム部落の近くでは第三紀のものらしい地層が烈しく褶曲しておりまた断層が発達している(第16図)。頁岩

第 16 図 Delaram 近郊のヒンヅウクシュ山系の烈しい褶曲をなす

第 17 図 第三紀層に属すると思われる石灰岩層の風化

層の奥には時に数10cm に及ぶ一見非結晶質粗鬆の石灰岩層が夾在していることがあり、頁岩層と共にほとんど直立している。これらの岩石が砂漠気候特有の風化を受けて、径数 m にも及ぶ大岩球となりこれが崩壊したあとに風穴の如き穴が発達している(第17図)。デララムからさらに100km 程北西に進むと、ファラー川(Farah Rod)に沿つたところにファラーロード(Farahrod)なる地名の部落がある。これは極めて最近開発された村落で近代式のホテルなどがあり、極めて最近にできたソ連邦のアジア・ハイウェイ建設の基地がおかれている。ところどころ中生代ないし新生代の地層が単斜構造をなす山々に囲まれた盆地状の土地で、準平原の中にところどころ残丘(Monadnock)を残している。この盆地内でファラー川(Farah Rod)の流路が大きく屈曲していて、肥沃の緑地が開けている(第18図)。

第 18 図 Farahrod の部落と残丘(monadnock)

第 19 図 Shindand 近くの Volcanic Dyke (Basalt) の岩脈群

ファラーロードからのハイウエイは、更にはげしい屈曲と、昇り降りを繰り返しながら、ほとんど真北に向って数100m にも及ぶ標高差のある山系と、その間を埋めた砂漠の間を縫いつつ進んでいる。この途中かなり大規模な背斜構造があるらしく、シンダンド (Shindand) の部落付近になると地層の走向は $N 60 \sim 65^{\circ} W$ で、傾斜は $60 \sim 70^{\circ} NE$ と傾斜方向がこれまでと逆になつてくる。石灰岩層を挟んだ頁岩、石灰質石岩の互層からなり、おそらくは第三紀層と思われる地層であるが、この中に安山岩または玄武岩と思われる火山岩脈が多数侵入している。この岩脈群は幅10数cm から10数 m にも及ぶものまであり、またその延長距離も時に数 km にも達していて規模はまちまちである。各岩脈間の間隔も数 m から数10 m にわたる。これらは剪断地帯に沿って貫入したものらしく、平行した岩脈の間を、直交または斜交する支脈でつながれている。一般にほとんど直立しているが、僅かに東または西に傾いているものもある(第19図)。先にのべたようにファラーロードからヘラート(Herat)に至る間のアジア・ハイウエイは東西方向のヒンズークシュ山脈主帯と、南 30° 西の方向に延びる扇型の分脈群の西部の末端部分を縫って作られているため、高原内での昇降を繰り返しながら北に向っている。地質学的には南から北に進むにつれて、次第に若い時代の地層を横切ることになる。ヘラートに近づくとき若い時代のものらしい火山岩または火山碎屑岩が、岩脈または熔岩流状に露出している。

ヘラートはこの国での大きい河川の一つであるハリ川(Hari Rod)流域の広い沃野内に位置するアフガニスタン北西部にある、最も重要な都市であつて、数10軒の距離をへだてて、北はソ連領中央アジア、西はイラン国に通じている。このため交通の要地として政治、文教、軍事の中心となつている。この付近はアレキサンダー大王の東征前からひらけていた地域で、現在のヘラート市街の外側に、既にアルタカナ(Artakana)という都市があつたのを、この地に侵入したアレキサンダーが彼のいわゆるアレキシサンドリヤとして現在の地にヘラートの都市を建設したものである。その後ヘラートはイスラム王の統治の下にある、コーサン王国(Khosan)の首都として栄えたが、ジンギスカンの西方侵略のために完全に破壊された。後15世紀になつて、ティムール王朝の始祖ティムリッド王(Timourid 1336-1405)によつて再建され、往古の隆盛を復興した。現在この町の北の高台に残る四本の高い塔(Minaret)(第20図)や、より北

第20図 Herat 郊外の4本の Minaret

にある回教寺院や、風車などの建造物で当時がしのばれる。とくにティムリッド王の王妃ガンハルシャド(Queen Ganharshad)の墓地は、ペルシャブルーといわれる青色のイスラム・タイルで装飾されたドームでこれが美しく夕照に映えていた。この町の回教寺院は、規模が最も大きく美しいものの一つであつて、現在もコーランの教習を行なつて教義を広める大本山の役割を果たしているらしい。こ寺院は、小規模ながら修理工場をもつていて、ドームの煉瓦の修復はもとより、タイルの脱落、破壊の修理をしている。この町に入るアジア・ハイウエイの両側には延長10数軒に及ぶ四列の松並木が車道と歩道の区別をしているので特に美しい景観となつている。この並木は、樹齢約20年の高さ約15m、直径10~12cmの松の木で、1~1.5m 間隔に植えられている。

この町には対照的な新旧2つの市街がある。旧市街は、回教寺院を中心とした地域で、古くからのまちなみが軒をならべ、そこには、食料品、衣料品、雑貨などの生活必需品を売る商店はもとより、旅行者相手の骨董品、土産物、貴金属品などを扱う商店など、小店舗が雑然とならんでいる。ペルシャ絨毯や、民芸色豊かな織物、羊皮製品など、素朴で趣味豊かな品々が商われているが、このほかに昔からあるアーケード式のバサールでは、かなりの繁盛ぶりをしめしているが、多くは電灯の設備がないため、日没とともに閉店することが多い。ここでは昨今衣料品を扱っている小店が多く、これらの衣地類は日本製か、香港

製品が主である。旧市街を劃した城壁は今も一部を残しているが、その東側に新しい都市づくりが進められていて、小公園を伴った中心街を囲んで、官公庁、銀行、大学などの近代建築が並んでいる。ホテルは数軒あるが、最近できたヘラートホテルは松並木のハイウエイに面した南の郊外にあり、近代設備をもっているものでこの街随一のものといえよう。

VIII あとがき

アフガニスタンの南部カブールとヘラートの間2,000km 余の乾燥地域を踏破したが、そのあいだ道に迷ったり、砂嵐しに会ったり、随分思いがけない支障にぶつかって困惑した。調査の期間が短時日であったため、旅程を無理したことが祟って、史跡の調査も、地学的研究も、ほんの瞥見程度に留ったことは残念であった。全域が砂漠型の台地であるため、ジープなら何処までも入り込めるものの、一見平坦に見えたところも実はかなりの起伏があつて、前後左右、揺れが烈しく、また舗装のないところは、砂塵もうもう、眼鏡をかけたものは、磨ガラス化の災禍を受ける始末であつた。ホテルの設備も内陸部は至つて粗末で、食事、入浴、用便等に不便を感じることしばしばであり、夜間点燈のないところ、または時間給電などで早々の就寝をしいられるところが多い。またハイウエイを離れて奥地に入ると宿泊設備は至つて少くないので、部落の有力者の私宅に一夜の宿を懇請することになるが、言語の不自由による意志疎通の困難がいつもともなつてくる。この国は史的文化財の保存については、特に大きい関心をよせているため、古い時代の出土品などの持出しは嚴重に取り締まられている。たとえ市中の骨董品店などで購入しても、考古局などの証明書を持っていないと、取り上げられる。陶器の小破片ですら、嚴重な査定を受ける。国内の輸送は運送会社が、この仕事に携っているが、到着の日時など全く不明で、全幅の信頼を托するにたらないことがある。考古学の上からも、地質学の上からも、この国は未だ充分に研究調査が進んでおらず、今後に期待することが多い。灌漑による砂漠乾燥地域の開発も、アメリカ合衆国によつて大きく援助されているものの、これが効果を奏して、原始農牧を脱して近代化するのは、はるかの将来であるかも知れない。この国の鉱産資源については、既に本誌に安斉氏*によつて触れられているのでここでは重複をさけて記載しなかつたが、最近ソ連邦の地質学者によつて探査が行なわれつつあるようで、全く未踏の地というべきでこの国の将来について大きい期待が持てるであらうと思われる。しかしながら現在のところ著しいものが開発されていないのは、遺憾である。

稿末にあたり、本学術調査団に対し、特に後援を与えられた、毎日新聞社を始め多くの諸団体、また筆者のために調査費の一部を御援助頂いた東京地学協会に謝意を表する次第である。またこの調査に同行して恒に御教示御協力を頂いた、松田、桜井両教授、および早大西南アジア学術調査隊の学生諸君の献身的協力に対して深く感謝の意を捧げる。

* 安斉俊男：アフガニスタンの印象，地学雑誌，79-1，1970.